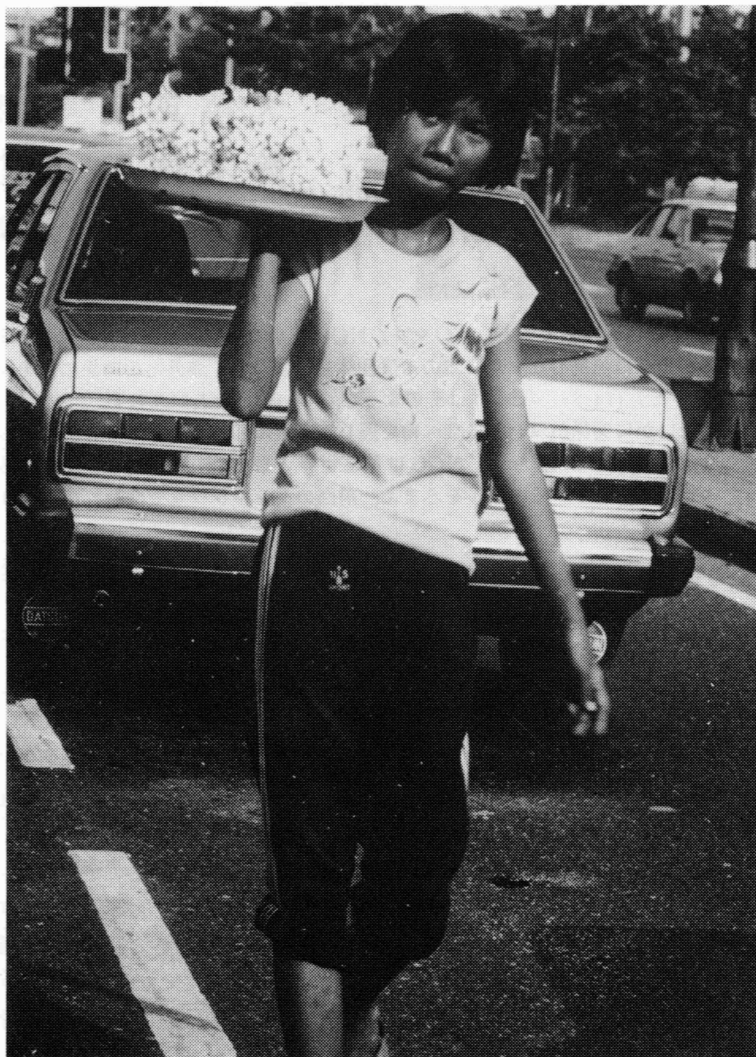


トリアル・アンド・エラー  
**Trial & Error** No.65  
試 行 錯 誤



日本車を縫うようにして物売りの子供たちが行く(バンコク)

特集 第三世界とわたしたち

シンポジウム 第三世界とわたしたち .....	2
援助とは .....	12
ばななぼうと乗船記 .....	14
東南アジアの味・雑感 .....	16
レストラン探訪 .....	19
JVCNEWS .....	20

## 第三世界とわたしたち

——国際的市民連帯は可能か——



大橋正明 松井やより  
鈴木佑司 北沢洋子  
岡本 厚 岩崎駿介  
(司会)

JVCが発足してもうすぐ7年目を迎えようとしています。NGOとか海外協力という言葉もよく耳にするようになってきました。これまで外のことには無関心だった日本の市民団体も、ようやく海外との関係に目を向けつつあります。10月に行われた「ばななほうと」(14ページ参照)はそのような新しい動きともいえます。

私たちが第三世界の人々といかに関係が深いかは食べ物を通して身近に感じることができます。しかし食べ物以外となると、まだまだそのつながりは見えてきません。NGOは第三世界と日本の市民をつなぐ役割がありますが、今まではそれが十分でなかったように思います。その反省をふまえ、前回のシンポジウムで問われたNGOの功罪と可能性をもう一度考えてみました。

### 〔I部〕

### NGOはどうあるべきか

岡本 前回の「検証・アフリカ救援」のシンポジウムではNGOの限界性が問われて終わりました。今日はそれを受けまして、援助の何が良くて何が悪いか。NGOはどうあるべきか、あらざるべきか。それぞれの問題意識の中で、NGOの功罪についてお話ししていただきたいと思います。はじめに岩崎さん、お願いいたします。

#### 知覚を広げるための活動

岩崎 市民運動は普通私たちの身の周りの問題について扱っているところが多いのですが、私たちの存在は国内によってのみ支えられているわけではなく、国際的な関係によって規定されているところがたくさんあります。したがって市民運動の中には、直接海外に出かけて行くとか、物やお金を送るとか、なんらかの形で海外の問題にかかわろうとするグループもあります。今日はそのようなグループ、ひとことでは「海外協力をやっているNGOグループ」の可能性と限界について議論したいと思います。

まず、最初にJVCの紹介をさせていただきますと、

JVCの活動は1980年、タイに流入したインドシナ難民を援助することから始まりました。彼らが危機的な状況を脱すると、生活の再建とか、人間的な生活を営むことに関心が移っていき、最終的にはその地において永続的な生活が営めるよう、難民救援というより、地域開発的な問題に取り組むようになったのです。JVCはその過程で試行錯誤をくり返し、われわれにとってこの人たちは何なのだろう。どういう関係にあり、どういう協力を進めたらいいのだろうと考えてきました。

われわれは第三世界の人々との連帯、あるいは友だちになることを命題にしていますが、タイ国境でベトナム軍の侵攻があった場合、実際逃げ出せるのは私たちボランティアだけです。難民たちはキャンプから外に出ることはできません。だから本当に友だちとは何なのか、彼らとわれわれはどういう関係にあるのか、ということを実際に考えざるを得ないのです。

JVCの活動の特徴についていいますと、まずこの運動は援助ではない、価値の押しつけではないとい



岡本 厚（おかもと あつし）  
岩波書店、『世界』  
編集部。

岩崎駿介（いわさき しゅんすけ）  
筑波大学助教授。  
JVC 代表。

大橋正明（おおはし まさあき）  
シャプラニール＝  
市民による海外協  
力の会代表。

鈴木佑司（すずき ゆうじ）  
法政大学法学部教  
授。日本平和学会  
理事。

松井耶依（まつい やより）  
朝日新聞社社会部  
編集委員。

北沢洋子（きたざわ ようこ）  
国際問題評論家。  
アジア太平洋資料  
センター運営委員。

うことです。また、これはわれわれの自己回帰の運動です。われわれは、国際的に規定されているが故に、国際的な問題にかかわることによって精神的・肉体的バランスを保持しようとしています。さらに違う価値体系のもとに住んでいる人間が交流しあうことで、違った世界、価値を認識し、われわれの独善性を排し知覚を広げることができます。

われわれの活動地は非常に生活条件も厳しく、その国の政府もなかなかひとすじ縄ではいきません。われわれはそこで生活し、現地の人々とともに、自然条件や政治的圧力と戦いながら、農業や植林をしているのです。われわれは決して彼らよりも有利な立場に立って何かをしているわけではありません。同じ地平に立ちながら、どう共感し、構築することができるのかということを模索しているのです。

この経験を JVC のメンバーだけにとどめず、より多くの日本の方々にも知っていただき、新しい可能性や価値体系を開く運動として位置づけたいといつでも考えています。

**援助する側の優位性を忘れてはいけない**

大橋 シャプラニールという団体の前身は、HBC（Help Bangladesh Cominittee）といいます。1971年、パキスタンからバングラデシュが独立したころバングラデシュの人々に手をさしのべようとしたのが活動のきっかけです。当初から“助ける”という概念はおかしいんじゃないかということで、1983年、シャプラニール＝SN（白い蓮の家）—— 市民による海外協力の会と変更しました。

それでは私の体験と今の岩崎さんの発言をふまえて、私なりの提起を行ってみたいと思います。

私が一番気にかかるのは、私たちと第三世界、私たちの場合はバングラデシュですが、その人々との関係です。岩崎さんは友だちを作ることだとおっしゃいましたが、それは非常に疑問であると思いま

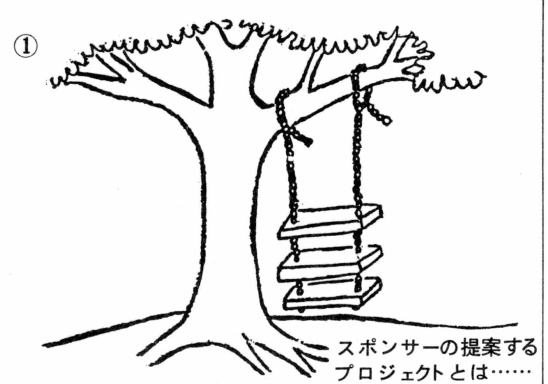
す。基本的に第三世界と呼ばれている国の人と向きあう姿勢として、それは承服できません。シェアするとか、友だちになることはそんなに簡単ではないと思います。

私たちはバングラデシュのある村で、むこうの人と同じような生活をしながら、女性の手工芸品組合とか学校を作って活動していました。ところがある晩村人と思われる人たちに襲われ、結局その村にいらなくなってしまった。難民と違い農民には自分たちの生活基盤があります。彼らは自分たちの利益になるなら村に入れてもいいが、伝統をかき回されるようなら自分たちを守るという意識があります。私たちがへんなやり方をすれば、パンと反発をくらう。彼らは私たちから見れば貧しく見えますが、彼らなりにきちっと暮らしていて、そこに関わることが安易にしてはならない。そういうことをその村で学んだように思います。

それからシェアという言葉ですが、相手側にとってシェアする必要性などあるのでしょうか。たとえば「お前たちの人間性回復のためになんでおれたちは助けなければならないのか」という発想があってもいいと思います。

私も友だちとか、平等の関係を結びたいとは思っ

**プロジェクト物語 税田芳三氏（在ソマリア）提供**



ています。でもやっぱり難しい。難しくなる原因は、私たちが金を持っていて第三世界にかかわっている、簡単にいえば援助をしているということだと思えます。岩崎さんは援助じゃないんだ、友だちなんだといいますが、やっぱり援助なんだということを申し上げたい。私たちが自分で切符を買ってタイやバンラデシュに行けるということ自体、私たちは圧倒的に優位に立っています。インドやタイで飛行機から降りたとたん、とても金持ちになった気分、これをインスタント・ブルジョワジーと私は呼ぶんですが、こんな経験はよくあることです。

つまり援助をするということは極端な話、金を持って行くということで、私たちにあって彼らにないのは金だけだと思っています。もっと端的にいうと、私たちが第三世界にかかわる時、金というかわり方が1つの軸になるんじゃないでしょうか。

彼らと平等にしているつもりでも本質的に違うということを見すえていかなければいけないし、援助の持っている暴力性も基本的な前提にしておかなければと思います。結論的には国際的の市民連帯は可能なのですが、非常に簡単じゃないよということ指摘したい。

### 途上国の市民団体との連帯が必要

松井 私がアジアで一番感じたのは、各地でヨーロッパやアメリカのNGOが活動しているということです。一方日本からは政府の開発援助（ODA）が巨額な援助をしています、NGOは量的にはまだまだです。

タイにWoman's Information CenterというNGOがありますが、これは驚いたことに私たちの売春反対キャンペーンにヒントを得て作られたのだそうです。ここに西ドイツのNGOやオランダ政府から財政的援助があるということでした。西欧の人々とアジアの人々には緊密なネットワークがあって、草の根として活動している途上国のNGOに西側のグループがとてもきめ細かく支援しているのです。

これに対して日本の態度はどうでしょうか。政府や企業がものすごく力を持っているのに民衆の側は財政的にも人的にも力がありません。今後このアンバランスな日本社会を変えていくという方法でNGOは力を強めていかなければならないと思います。これが第一点です。

最近マレーシアのペナンで、熱帯雨林の問題についてNGO間で話し合いが持たれました。主に欧米の

熱帯雨林を守る運動をしているグループが参加していたのですが、そこで日本がアジアの森林を切ってしまうひどい状況にあると、次から次へと調査結果を発表するのです。主催団体であるマレーシア地球友の会の会長が最後に私に言ったことは、「いったい日本人たちはどうしたらこの問題を認識してくれるのか教えてくれ」というものでした。「日本にも水俣とか成田とか英雄的な闘争があるのだから、日本の国民にもできないはずはないのだが、なぜできないのか教えてほしい」その3日間というものは日本がずっとターゲットになっていたのです。

これは1つの例ですが、アジアのいろいろな会議に出ると日本はいったい何をしているのか、政府や企業は何をしているのかということ以上に、日本の市民は何をしているのかということをよく問われます。日本の市民が外には目を向けないという姿勢である限り日本のNGOも強くはなりません。私が言うNGOとは援助活動をしているNGOばかりを指すではありません。主婦連のような婦人団体、消費者団体、労働組合もありますが、残念なことに彼らの目は全く内向きののです。

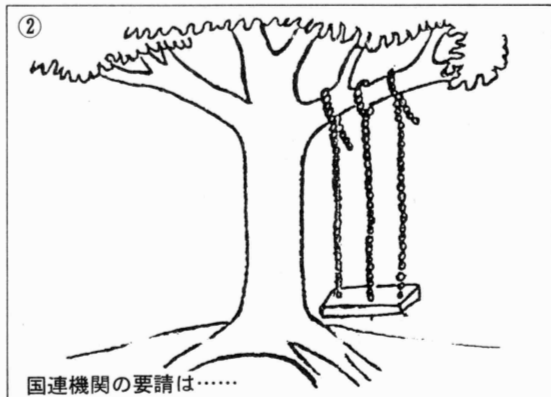
ヨーロッパの身障者団体は途上国の身障者をどう援助できるか、生協の場合も途上国の生協をどう援助できるのかを考えます。単に援助団体だけでなく、一般のあらゆる市民団体がもう少し日本の外に目を向けなくてはいけないんじゃないか、というのが第二点です。

第三点としては、社会の不公正な状況に対する意識とか、人権意識が日本人は非常に鈍いのではないかということです。あまりに経済中心の価値観が強いので、こういうものが鋭くならなければNGO運動は高まらないと思います。

開発問題について考えるのに、『正義を持った開発』『人権を伴った開発』という言葉をごへ行っても言われます。西欧のNGOは、援助をしなくてもいい状況にするのにはどうしたらいいか、という立場で考えています。援助と平行して国内で開発教育をやり、自分の国の政治、経済のあり方を変えていくのも1つの方法です。イギリスでは途上国にお金を貸しつけ、借金で首が回らないようにさせている銀行のボイコット運動をしているところもあります。

西欧ではさまざまなNGOが途上国と関係を持っています。中には武装闘争をしているグループを援助するなどして、南北問題の構造的な変革をめざして

いるところもあります。私は今の日本の NGO はちょうどチャリティから開発の段階へ進んだところだと思います。昔から日本でも国際連帯運動というものがありました。さらに途上国で今の体制を変えていこうとしている運動との関係を深めなければと思います。それから ODA の監視活動もこれからの大きな課題ですね。結論としては第三世界との連帯はもちろん可能ですが、どういう形の連帯を考えていくかを今日前向きに議論できればと思います。



### 日本型の NGO をめざせ

鈴木 今までのお話をうかがっていると、実際に現場にかかわっている方は連帯は難しいとおっしゃるし、外から見ていての方は連帯は可能だとおっしゃいます。

松井さんは先進国と途上国の NGO をどう結びつけるかというお話をなさいましたが、私は日本の NGO はそのような西欧型とは違った形の NGO を作りつつあると思います。ヨーロッパの NGO をまねしなくても、独自の可能性を持った運動として展開できるのではないのでしょうか。

私はタイで UNHCR や UNBRO の責任者の方から次のようなことを聞きました。「日本の NGO 活動は、かつてヨーロッパの NGO が持っていた新鮮な活動の原型をとどめている」と。ヨーロッパの場合は組織や制度ができあがり、専門家が加わっているので『職業』としての援助活動になっています。これは能率がいいし、制度もよく整っている。しかし現場の人々といっしょに働くという点についてはどうでしょうか。タイやカンブチアでは日本人と見分けのつかない人もいます。日本人は彼らの中に入って働きやすいということがいえますし、日本人のボランティアには等身大で物事をやろうという、一種のフレッシュな気持ちが残っているように思いました。

NGO の方たちはだいたい自分たちは正しくて政

府が悪い、あるいはほかの NGO が悪い、相手の国、住民が悪いと考えています。はたしてそうなのだろうか。これはおそらく今日の重要なテーマだと思いますので、NGO について歴史的に位置づけてみたいと思います。

NGO とか政府以外の組織が国境を越えたり、伝統的な地域を越えて活動するのは、基本的な枠が変わった時期です。それに応じて中にいる人間も社会的な動きを高めていき、伝統的封建社会を壊していく。その一方で新しい単位としての国家に対し、民主主義という新しい要求をうち立てていきます。

今の段階で私が一番重要だと思っているのは、それぞれの国が民主主義を実現し、帝国主義的支配ができないように国内的なルールを作る努力をしながら、実は南北に巨大な不平等ができ上がっているということです。これはどうしたらいいのか。この不平等は単に政府が悪いといっただけのものではない。一国の政府を変えたところで多国間関係は変えられない。それではどうするか。たとえば革命を起こす。しかし革命のコストは結局民衆が負うことになる。結果、一国型革命は変化の選択肢とはなりにくい。第三世界においても革命はだんだんやりにくくなっているのです。それで NGO というものが変革の担い手として関心を集めてきました。NGO は決して革命の代替物ではありませんが、次のような特長をあげることができると思います。

今日の NGO の最大の魅力は権力性がないことです。国家の役割を補完するような運動とは区別されるべきです。このことを確保しなければ国際的協力などあり得ません。お金を与える時も非権力性を確保していなかったら、やっぱり与える側が強いに決まっています。

次の特長は上下関係に基づかないこと。援助の効率をよくするためには、システムとか命令システムが必要だと考えられがちです。しかし効率を考えて上下関係を作ることが本当に必要なのだろうか。根本的に価値観を変えていく必要があると思います。つまり上下関係を否定するというのが二番目。

三番目は量か質かです。社会をひっくり返していくような国際活動を支えている最大のものは資本です。スケールからいえば多国籍企業にかなうものはありません。フィリピンの伝統的支配層の足元を崩せるのは大衆運動よりむしろ資本の論理かもしれない。ところがこの資本の動きを誰がチェックしたらいいのか。第三世界の政府は新しいタイプの国内的、

国際的不平等を生む資本を喜んで受け入れるばかりです。NGOの中にもこれを受けていこうとするところも出てきます。だとすると、これを徹底的にチェックしていくには、質の問題を議論する組織が絶対あるべきです。援助の効果を考えるばかりでなく、援助とは何かを考え続ける組織があるべきで、それこそNGOではないかと思えます。



### 援助によって南北問題は解決しない

北沢 私は援助によって南北問題や貧困の問題が解決すると考えるのは傲慢だと思います。それはJVCの方もシャプラニールの方もすでに認識しているはずで、同じことが連帯についてもいえると思います。私は21世紀にならないと先進国と第三世界の民衆の連帯というものはできないと思います。自分を変える先進国側の闘いがなければ相手に連帯を求めることはできません。今のままで連帯を唱えてもおこがましいし、スローガンとして掲げられるのは非常に遠い将来のことだと思います。

私は20代のころ、カイロにあるアフリカの独立を支援する組織で働いていました。そのころ南アフリカのアパルトヘイトについて知っていましたが、のちに現地に行ってみて、これは国家レベルで反対できる問題ではない、日本人一人一人が問われているのだと思いました。日本では人々がアパルトヘイトに関係ないように生きていますが、関係ないわけじゃないのです。皆さんの食べる砂糖の四分の一は南アフリカから輸入されている。黒人労働者は囚人のような待遇を受けています。私たちは奴隷労働による砂糖を安く買って食べているわけです。

このような不正に対する怒り、アパルトヘイトに加担している企業や政府に対する怒りがなければならぬのに、どうして私たちにはその怒りが無いのでしょうか。アパルトヘイトといっても誰も心を動かされることがない。アフリカの飢えた子どもを毎

日テレビで見せられなければ、何もしようとしないので。

こういういろいろな理由をつける日本人がいます。たとえば日本人には宗教感が無いか。しかし日本ほど宗教団体が繁栄し、お金を持っている国はないのです。仏教の慈悲はキリスト教の愛よりも豊かなはずなのに、ギブ・アンド・テイクにさえなっていない。強大な労働組合もありますが、自分の生活を守るためには闘っても日本という国については満足している。結果的には無意識にですが日本がより豊かになって、第三世界を搾取しろという姿勢があるのです。

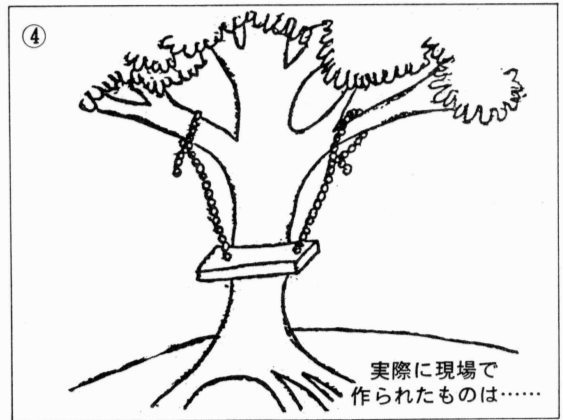
こういう日本がどこから来ているのか。私は日本人の生活がいいかげんになってしまった、無感覚になっていることだと思うのです。疑問を持つということが全くないのです。ただ今松井さんが熱帯雨林のことについて話されましたが、私たちは熱帯雨林と向き合って暮らしています。これから熱帯雨林はもっとひどい状態になっていくと思いますが、これは皆さんの日常の問題です。

“第三世界”といわれた時、遠い、関係ない、大変だなどといますが、現実にはさきほど岩崎さんや大橋さんがいわれましたように、私たちはもう第三世界に入り組み、がんじがらめに生きているのです。それなのに第三世界への意識が抜け落ちている。自分自身の生活に対しての規律がなく、いいかげんな暮らしへの反省がないのなら、これは援助とか連帯といった問題を議論する以前の問題だと思います。第三世界から吸い上げたところの中で生きていて、少しの援助をしたところで、企業や政府のやることのせいぜい手直しでしかない。乱暴な言い方をすれば、援助が南北問題を解決するわけではないということです。つまり今の日本の状況から援助は是か非かと議論する前に自分の生活を考えてみよう、というのが第一です。

これまで企業は利益を得るのはあたり前だし、労働組合はそのメンバーの利益のためにあるものだとされてきました。ところがそうではなくなってきているのです。企業の社会的責任というのは、公共の場に花を植えるなどという問題ではなく、企業という組織が社会的に存在する意味を考えるべきで、そういうことをやらない企業は取り残されていくでしょう。それに企業の構成員である人間はそのことについて声をあげるべきで、企業に入ったからには企業の人間としてがむしゃらに働かなければクビに

なってしまうというのは間違いだと思います。今こそ勇気をもって言うべきですね。

そういうことからしていかないと JVC の悩みはつきないと思います。援助をどうするか、JVC 自身が非常に高いところで悩んでいるわけですよ。難民が出てきた原因である戦争とか、国際政治の問題をぬきにして援助してもだめなんじゃないかとか。私は最初そういう JVC を批判して下さいと頼まれていたのです。でも JVC を批判するなんてとてもいやですね。少数の人が献身的にやっていたら、私がくどくど言えますか。言うのは簡単ですが、そういうことを言っても問題は解決しません。それより JVC を孤立化させた状況をわれわれが作っている



ということ、声を大にしていいと思います。

## 〔II部〕

### どうしたら市民連帯ができるか

**岡本** それではこれからは話をまとめていきたいと思ひます。この「国際的市民連帯は可能か」という『連帯』という言葉についてどうとらえるか。もう1つはなぜ私たちはこんなにも内向きなのだろうか。なぜ外に関心を持たないのだろうか。どうしたらいいのか、具体的な話をしてみたいと思ひます。それでは岩崎さんからお感じになったことでも。

**岩崎** 的確な御発言をいろいろ受けまして感ずるところが多いのですが、議論すべき点が2つあると思ひます。1つは NGO の今後に向けての可能性というか、限界について。もう1つは、こういう認識をどうやって広げていくかということですよ。

しかし、私として一番気になるのは、大橋さんがいわれた『連帯』か『援助』かという問題です。私の言う連帯、“友だちになろうよ”ということについて具体的な例をあげてみます。これは“イメージの交換”ということにも関連があると思ひます。

JVC に柴田君というメンバーがいるのですが、彼がソマリアについていろいろおもしろい話をしてくれます。彼がソマリア人に車で買物物を頼むと彼らは何時間経っても帰ってこない。彼らは行く先々で友だちに挨拶し、お茶を飲んだりするので遅くなってしまふ。そこで柴田君はおこるわけですよ。これは柴田君とそのソマリア人との間の価値体系の違いなのです。柴田君が彼らに何かしてくれと頼み、すぐ帰って来ると考えるのはわれわれにとってはごく当たり前のことなのですが、しかし物事を『効率的』な態度で考へているからですよ。彼らはその効率性よ

りも『友人と話すこと』の方が大切な世界に住んでいるのです。

またソマリアはとても役人が強く、JVC にも自分の親戚の者をやとえと言ってくるのです。そこを柴田君がはねつけていたら、突然 JVC はソマリアから出て行けと言われてしまった。ところが今度は難民が、それでは JVC がかわいそうだと言ひ止めてくれたのです。JVC は現場でのサポートがあつてそこに残ることができました。

私たちが彼らとの関係は、もとより感傷的なものや、単なる善意などは受けつけない厳しいものがあります。が、そういうものを乗り越えるものがある。私たちの行動は、人を送ったり、物やお金を支給する場合があるという意味で、もちろん『援助』の枠内で仕事をしているといひます。しかし問題は『援助』の枠組をどう乗り越えるかということですよ。『援助』という枠内にとどまるのではなく、日々の心構えや運動の方向性には、“友だちになること”を具体的にめざすしかないと。彼らとわれわれとの関係を考へる場合、国際的な政治構造の中での持てる者と持たざる者、富める国と貧しい国という格差を考へ、これを政治的、経済的な問題として把えてゆくことはもとより大切なことですが、実はその富めるもの、富まないものの縮図みたいなものが現場にあるのです。したがってその現場の中でどうかかわるか。どうやってゆくかが実は彼らとの関係を肯定的なものにするか、否定的なものにするかを決めているのです。ですからその一瞬、一瞬が『援助』になった

り、『連帯』や友だちになったりする。その中でわれわれの経験を豊かにし、その経験を日本に伝え、より多くの方々の共感としていく。それが鈴木さんのいわれた日本型 JVC のあり方だと思います。

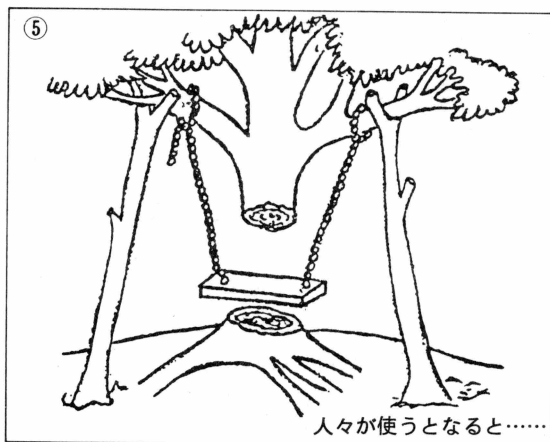
#### ヨーロッパの NGO から学ぶべきところは学ぶ

松井 鈴木さんはお帰りになりましたが、鈴木さんのおっしゃった日本型の NGO なんてそんなに簡単にできないと思います。よくヨーロッパから学ぶものはなくなったといわれますが、やはりいいものはいいのでして、ヨーロッパの NGO から学ぶものは学ばなければならない。たとえば南アの問題についても、オランダなどでは主婦がアパルトヘイト反対を叫んで警官になぐられることもあるぐらいです。反対運動には数万人の人が集まっているわけです。ところが日本ではどうかというと、こういうことに関心を持っている人は非常に少なく、1億2,000万の人口の内わずか数百人しか動いていません。この現状をなんとかしたいと思うわけです。

それから意識化の問題としては、短期と長期があると思います。短期的には具体的な問題について取り組むしかない。現在の日本にはやらなければならないことはいくらでもあります。さきほどは熱帯雨林を取上げましたが、味の素については東南アジアの消費者運動がすごいキャンペーンを始めています。そして「なんとかして日本でそれに対応して下さい」と言われるわけです。粉ミルクのこともありますし、ほんとに問題はいくらでもあります。そのいずれかに取組まなければ、いくら議論をしてもしかたがないと思います。

それから日本では外圧にしか頼れないということをも最大限生かした方がいいですね。日本政府は内部で運動しても聞く耳を持ちませんが、外から言われると動く場合がありますから。日本国内の運動は他のアジアの運動とうまくタイアップしていく。たとえば資料を提供することなどはできると思います。

それからもう1つ。鈴木さんが言われた中に、NGOが見直されてきたとありました。ヨーロッパでもNGOはこの数年間ものすごい大きな役割を果たしてきました。約500ぐらいのNGOが横につながりを持っていろいろな活動をしています。さきほど鈴木さんは専門家すぎてはだめだと言われましたが、私は日本ではもっともっと専門家がNGO側に来て、発言したり、運動に参加してほしいと思います。初心に帰り運動するというだけではNGOは少しも変



わりません。日本のNGOはヨーロッパなどの他のNGOからも完全に疎外されています。

次に意識化を進めるための長期的方法として、私は人作りをあげます。つまり途上国の問題にかかわる人が日本ではあまりにも少なすぎるということです。これだけ大学卒業生がいるのに、開発問題はどこで聞いたらいいかとアジアの人が私に聞くわけです。開発問題の研究所すらないのでですから日本には。ですから長期的には人作りがどれだけ大事か。そうしなければお金も人もNGOの側には来ないと思います。

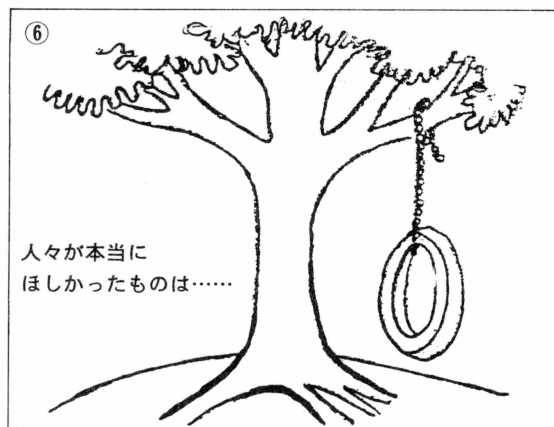
#### 現地の人の身になって考える

大橋 JVCがトライアル・アンド・エラー（試行錯誤）という機関誌を出しておられます。バングラデシュは援助の実験場といわれる国でして、250ぐらいのNGOが入っています。そこで組合活動や農業改良をやって、いろいろ経験したのち潰れてしまうこともあるわけです。それでいい経験しました。勉強しましたと言っていいのかなという感じを持っていたので、最初にこのトライアル・アンド・エラーをもらった時にこのことを思い出しました。

私がバングラデシュにいた時、スタッフの1人が「お前らは信用できん」と言いました。「お前ら」とはいわゆる外国人ということです。彼は言うのです。「最初、お前ら、おれたちが独立した時大量に粉ミルクを持ちこんで、子どもの栄養を改善すると言ったのに、今度は子どもが死ぬからだめだという。お前らの言うことは信用できん」というわけです。岩崎さんの言うトライ精神とか、柴田君のソマリアの体験というのは新鮮だし、大事なこともかもしれないけど、それを手ばなしで喜んでいいのかという気がします。

もう1つ感じたことです。私たちは私たちなりにバングラデシュの人とつながっているつもりで彼らの持っている文化や価値観に接し、いろいろなことを学びました。でも彼らが持っている価値観や精神世界が私たちとかけ離れているかということ、そうでもない。私がインドやバングラデシュの村に何年か接して感じたことは、やっぱり村もすごくどぎついというか、1本の草木に至るまで全部所有権が決まっているのです。またこの家は外国人が泊ったからお金をもらえるだろうとか、援助をもらっている人間がバザールに行って買い物をするとお前は儲けてるんだからと言われておつりがもらえないとかあるわけです。だから私たちが失ったパラダイス的な共同体があることも事実ですが、そればかりではないということです。

私たち自身は近代化の中において、だからこそ近代化とは逆の方向に向いているというのはわかるのですが、向こうの人には近代化したいという思いが非常に強いのです。飛行機に乗りたい。ラジカセがほしい。化学肥料を持ちこめば収獲高も上がり、飢えも救われる。このことで10年後に土が死んでしまうという論理は通用しないのです。岩崎さんのおっしゃる“友人になる”ことを否定するわけではありませんが、このような問題をもっとJVCでも問題にしてくれるといいと思います。



### 不正に対するの怒りが大切

北沢 一般にこういう活動をしている人は禁欲的で、変わった連中と思われがちなのですが、さきほどからの岩崎さん、大橋さんのお話をうかがっていると、とても人間的な感じがするんですね。悩みもあるし。でもその議論の中身があまりに先進的で、何も動いていない私たちがうんぬんしても抱えている問題は解決しないと思います。

最近やっと日本でも、NGOが評価されるようになってきましたが、カナダなどは20年も前から政府がNGOを評価していて、政府から自動的に資金が出るのです。そうするとどうなるか。自分で集めたのでもない巨額なお金が入りますと、その組織はまず腐敗します。そして与える側に対して、あたかも自分のお金であるように傲慢にふるまう。いいかげんな組織では信用されませんから、規律や倫理も厳しいものになる。それでそのことについてたたかれたり、反省したりして育ってきたのです。そういうところと私たちと一緒にできません。日本でそんなことをしてもNGOを育てたことにはならない。やはり浄財という言葉を使いたいです。人々が出すお金でなければいけないし、人々が南のことに関心を持ち、心を動かされるものでなければならぬと思います。

アフリカが飢えている。大変だ。お金を、毛布を送りましょう。ところが新聞が報道しなくなったらもうやらない。そうではなくてしつこくやるというのが非常に大事なんじゃないかと思います。

それからこのアフリカキャンペーンですが、私はこれがマイナスだったことを声を大にしていたい。キャンペーンが始まった84年夏は南アフリカの黒人が立ち上がり、ものすごい闘争を始めました。そのころヨーロッパやアメリカでは反アパルトヘイト運動が社会的正義の運動になっていたのに、日本では飢餓のアフリカの陰に隠れ、アパルトヘイトについては誰も耳を貸してくれませんでした。ですからアフリカキャンペーンはアパルトヘイトを隠すためにやったのじゃないかと疑うくらいです。

第三世界を苦しめている銀行の債務の問題がありますが、誰が苦しめているのかということ、日本の銀行なのです。しかも債務の70%は利子なのですが、メチャクチャない方をすれば、第三世界の銀行は日本の銀行に利子を払うために苦しんでいるのです。私たちにとって銀行は絶対の信頼があるのですが、その銀行は私たちの知らない利子に向こうから取っているわけです。その儲けがどこに行っているか怒らなければいけません。何でも気に入くないことは怒る。それが大切です。

それからもう1つ、日本人は強い反戦意識があり非常によくやっていますが、その思いがどれだけアジアに向かっているかということ、それがそうでもない。アジアを侵略し、アジアに負けたとは思っていませんから。そこのところをもう一度考えなおす必要があると思います。

### 〔Ⅲ部〕

## まず自ら行動を——質疑応答から

岡本 今度は会場の方の御意見もうかがってみましょう。これからの私たちのあり方、または方法について御意見、御質問がありましたらどうぞ。

### 熱帯雨林を売っても儲からない

■僕たちは日本という先進国に生まれ、南の低開発国からの搾取によって存在しています。日本の社会を変えないで、援助しているだけで本当に解決になるのでしょうか。もっと日本国内、自分たちの足元を見つめる必要があると思います。

■熱帯雨林のお話がありました。マレーシアの木を日本が買わなければ現地の人が困りませんか。

松井 最初の方の問いかけへの答にもなるかと思いますが、熱帯雨林のことを考えていくことは日本のことを変えていくということなんです。日本ではものすごい量の熱帯雨林が使われていますから、そういう暮らしのあり方を変えていくことにつながっています。

マレーシアのサバ州やサラワク州に行き始めて知ったのですが、そこに住んでいる人にとって熱帯雨林を切ることは何の得にもならないのです。先祖代々からの土地を追われ、絶望的な抵抗運動をしています。向こうに住んでいる人と政府は分けて考えなければならないと思います。

北沢 たしかに木材を輸出することで外貨が入るかもしれませんが。ところがそうでもない。それが南北の差です。日本の大会社が現地に子会社を作り、そこが相手政府と契約します。その子会社は親会社に非常に安い値段で売ります。そこでその子会社は赤字ということで税金も払わず、親会社だけ儲かるしくみになっています。

### 自分たちでネットワークをもとう

■私のまわりにはこういうことに関心を持つ人があまりいません。松井さんももっと新聞で書いて下さい。アジアの情報が少ないです。

松井 日本には言論の自由があって何でも言えるとお思いでしょうが、実はそうではありません。読者が好まない情報を新聞は載せませんし、読者自身がマスコミを育ててほしいと思います。マスコミに期待せず、自分たちでミニコミを作るなどしてネット

ワークを作っていくことだと思いますね。

■どういふことをしたらいいのかわからないという人がいますが、自分たちは割り箸を使わないことから第三世界を考えています。こんなことから少しずつネットワークを作ることができます。

### 政府の開発教育に期待できるか

■さきほど松井さんが人作りということをおっしゃいましたが、政府の提案する開発教育に期待できると思いますか。

松井 今の政府の教育には期待していません。自分たちでやればいいと思います。日本の先生方は教科書に期待しすぎています、開発教育もNGOとか私たちの力でもっとやっていく必要があると思います。

北沢 文部省が国際化教育を推し進めています。開発教育とは南北問題教育だと思うのですが、それを国際化という言葉を使ってごまかしている。それに関連して、語学は何をしゃべるかという手段なのですが、とにかく外国人と英語でしゃべればいいのかという考え方にも問題があります。

■文部省は初めから開発教育などという言葉さえ知りませんでした。政府がNGOという言葉を読めたのが1982年です。政府が開発教育の先手を打って国際化教育としたというのは買いかぶりじゃありませんか。

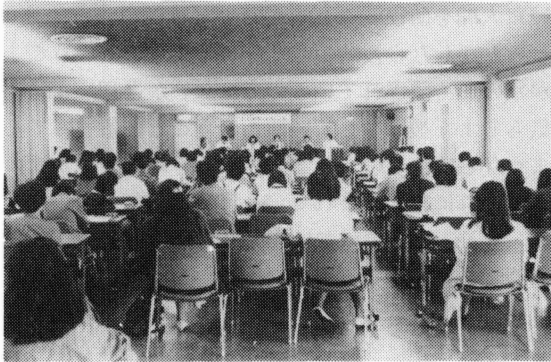
それから私はこの6月にDACの開発委員会が開いた、「サハラ以南の農村開発、農業問題についてどんな役割を持つか」というシンポジウムに出席しました。そこで話し合われたことは、アフリカの土着のNGO、特に女性のNGOとどう手を結ぶかということでした。

私はNGOの連帯という時2つあると思います。1つは日本のNGOが他の先進国のNGOと連帯すること。もう1つはアジア、アフリカのNGOとの連帯です。これはやらなければならないことだと思います。

北沢 外務省に国連局があるのに、10年前からやっていた国連でのNGO会議を政府が知らなかったというのはおかしい。もし知らなかったとすれば意図的なものです。開発教育とせず国際化教育と言い替

えたのも意図的だと思います。

連帯についてですが、アフリカの NGO にいくら援助しても、する側の NGO の後ろにその国の大資本なり、多国籍企業があって、それが搾取して貧困が生まれているとすれば、その連帯とは何だろうと思うわけです。もちろん誠実な人間同士としてわかり合えることはあるでしょうが、自国の大資本や政府が作り出している悪業を止めさせない限り本当の連帯にはならないと思います。



#### なぜこういう現状なのかが問われていない

■今までのお話でどういう現状なのかということとはわかりましたが、それではどうしてそうなのかということが言われていません。例えばヨーロッパの NGO は連帯できるのに日本はなぜできないとか。

それから問題ごとに解決にあたるといわれましたが、それぞれの問題はリンケージされていると思います。熱帯雨林をとっても、政治、経済、軍事、社会との関連がありますし、その関わりを分析しなければ問題ははっきりしないのではありませんか。

北沢 ヨーロッパにしてもアメリカにしても第三世界の問題に関心があるというのは、国の中に第三世界の人々をかかえこんでいるからです。逆に日本は工場を外に出して、日本人からは見えないところで儲けるだけ儲けている。第三世界によりかかる体制がありながらそれが見えないのです。ですから私たちの側に意識革命がない限り変わらないでしょう。これがなぜこうなのかという私なりの答です。

岩崎 日本とヨーロッパの NGO がなぜ違うのかということについては歴史的に説明できると思いますが、基本的にそれは大した問題ではないと思います。ヨーロッパとの差異を問われているのだとしたら、それは個人の主体性においてでしょう。つまり「何かやれることはありませんか」という問いかけそのものが問われているのです。

#### 自ら行動をおこす

松井 今日の議論の進め方の最大の欠陥に気がつきました。もしこれがヨーロッパやアメリカなら前半の話が終ったら、具体的にどうしたらいいかとグループになって話しあうわけです。いかに行動力が大事かということをお願いしたいのです。

それから1つのことをやればいろいろな問題が見えてきます。いくら本を読んでもわからなかったことが、割り箸ひとつとっても自分たちの生活のあり方を変えていくこともできると思います。

大橋 私たちに向かって立派なことをして偉いといわれているようですが、私たちとしては好きなことをやらせてもらって申しわけないと思っています。こういうと北沢さんに「あんた怒りがないのね」なんて言われそうですが、私としてはインドやバンングラディッシュが好きなせいもあって、これらの国々とかかわる中からいろいろなものが見えてきました。ODAや多国籍企業のことともそうです。でもきっかけそのものはシャプラニールをやっておもしろいということです。私たちは JVC とはちょっと違って、ボランティアを送る団体ではありませんが、バンングラディッシュの農民の暮らしが良くなるように協力しよう、援助や開発の問題をもっと考えてみたいという方は、私たちの日本での活動を手伝って下さい。

#### 地域の問題から世界へ

岡本 すべての問題にかかわるといえるのは不可能ですが、地域の教育問題など足元にある問題を周囲の人といっしょにやりながら、それがどんどん広がって、地球的な規模での問題を解決できるようになっていくと思いますね。もちろん私自身仕事の上でもがんばるし、その中で JVC やシャプラニールともつながりがでてくると思います。

岩崎 最後にこんなにお集まりいただきましてありがとうございます。これからどうしたら良くなるか。私も考えます。皆さんも考えて下さい。

当日このシンポジウムについてのアンケート用紙を配りましたところ、貴重な御意見、御感想が多く寄せられました。参加者の熱意を感じ、この催しを企画した関係者一同喜んでおります。誌面の関係上それらをお載せすることはできませんでしたが、今回のシンポジウム、学習会の参考にさせていただきます。(編集部)

# 援助とは

ともに未来のビジョンを考える

上智大学助教授 ルーベン・アビト

富めるものはより富んで、貧しいものはより貧しく

私たちが住んでいる世界には富める国と貧しい国があって、固定概念としては富める国が貧しい国の開発とか、発展をとげるために援助すると思われています。ところが今の世界を見てみると、国家単位の援助は貧しいものをより貧しくし、富めるものがより富めるようなくみになっているようです。援助がそれらの国の人々を助けることにはならず、援助にかかわった政府の担当者とか一部の人が利益を得、その経済力をさらに拡大する結果となっているからです。

国連が60年代に開発の10年、70年代の第2の開発の10年を設け、先進国から第三世界諸国に経済援助が行われましたが、それに伴った現象は先進国と第三世界諸国間の隔差の広がりでした。これは政府間援助の構造に根本的な問題があることを物語っています。多くの援助は無償に与えられたものではなく、借款として受ける国の対外債務の増加をもたらしたただけでした。支払いにその国の輸出からの収入を使わざるを得ず、国民からも税をしぼり取らざるを得ません。だからその国の貧しい人はさらに貧しくなっていくのです。

## 自己満足の援助

そのような国家間の援助に比べて、NGOによるお互いの市民同士の援助の方が効果的ということもあって、NGOに期待することは大きいのですが、これにも注意が必要です。何かを与えているんだとか、援助をしているんだという意識に陥らないとも限らないからです。たとえば富める日本の快適な生活の前提には、さきの政府間の搾取的な構造があるのですが、それに目をつぶり、あるいは気づかずに援助をすることは単なる自己満足に過ぎません。

ここで私はフランス・ Coppola監督の「地獄の黙示録」の一場面を思い出します。これはベトナム戦争の映画ですが、アメリカ軍のパトロールボートが川を見張っていた時たまたま向こうから小舟がやってきました。「応答せよ」と拡声器で言うのですが、向こうから何の返事ありません。そこで怪しいというわけで発砲するのです。しかし小舟の中には傷ついた老人と農夫がいるだけでした。ある者は

まだ息がありました。そこである将校は「病院につれていけ」というのですが、それに矛盾を感じたもうひとりの将校が「そんな偽善的なことはしなくていい」と、その場で重傷を負った人を撃ち殺してしまったのです。同じ人間が右手で殺し、左手で傷ついた人間を助けるのと同じです。

もしかしたら援助のしくみの中にもこういうことが別の形で隠されているのではないかと思います。気もちよく援助をしているということに留まってしまうならば、そのもっと大きなくみに気づかず、またそれに巻きこまれていく自分にも気がつきません。そこが問題ではないでしょうか。そして「援助をやっている」という人ほど、このしくみに気づきにくいのです。もちろん善意でしょう。しかし援助をしていることに安心しきってしまう可能性もあります。安心感が社会全体の構造とか、政府間で成されている不正に目を向けさせなくなってしまうこともあります。

## 援助と政治は切りはなせない

援助をしている人は自分は搾取的な大企業とは関係ない、悪いのはお互いの政府であり、そういう企業なんだと割り切ってしまう人がいるかもしれませんが、しかし善意だけで物事が解決しないように、搾取的な企業に直接自分がいるかどうか問題ではありません。社会全体の構造に自分も加わっているからです。

「私は〇〇国の援助に専念するんだ」ということは仕事の分業という上では必要かもしれませんが、その人のやっていることは社会の生み出す多くの課題の中のひとつに過ぎません。自分のしている援助以外の問題にも気を配ってれば、政府や企業が不正行為を犯した時には敏感に抗議の声を上げることができるとは思いません。むしろそのような人々が援助活動することで、自分たちが接したアジアの国の人々が、自分たちや日本政府をどう見ているかを、アジアの民衆の視点で理解することができると思います。ところがいいことをやっているのだから政治的なことはぬきにしようという姿勢では、そのようなことは見えてきません。結局は政治的な大きな動きに利用されていることに、気がつかないままになってしまう

のです。特にフィリピンのスラムの問題を解決しようとするれば、必ず政治にぶつかります。

たとえばスラム街では何百世帯に1本しか水道がなく、人々は何時間も並んで毎日使う水を得ていません。政府は彼らが不法に土地を占拠しているといいます。政府は彼らを追い出し、観光客用のホテルとか、工場を建設しようとしています。国家予算の大部分が軍事費とか一部のエリートだけが利益を得るようなプロジェクトに使われるため、住民の保健衛生とか、環境整備にはほんのわずかしが使われません。ですから生活上の問題は政治的問題と切り離して考えることはできないのです。特にそれが顕著だったマルコス政権を支えていた日本政府の役割を、日本の方も問題にしてほしいのです。フィリピンのスラムを援助するだけでは中途半端じゃないかと思えます。

#### 民衆の側にたった援助を

私はこのことでバンド・エイドを思い出します。バンド・エイドは傷口を一時的にふさぎ快感を与えますが、それをつけているため悪いものが出ないこともあります。ですから現象に見えるものばかりでなく、病気の原因がどこにあるかということにも目を向けなければなりません。お互いの国の民衆同士が結びつき、国家が民衆を犠牲にするような政策をとった時は力を合わせて抵抗の声を上げる、それが一番大切ではないでしょうか。

日本政府は「内政不干涉」という原則で、フィリピン政府を批判することはできません。しかし市民なら自分たちがともに行動している人々を苦しめている政策を抗議するんだということはいえます。たしかに自分の属している社会なり組織なりを批判するには勇気がいります。社会から白い目で見られるのではないかと、左遷させられるのではないかと思っていては何もできません。私自身はその原動力を弾圧の中にいる民衆から得ました。彼らが命をかけてやっているのに自分が何もしないでは恥ずかしい気がします。

今回のアキノ大統領の訪日で日本からの援助額が引き上げられました。さらにフィリピンは借金をかかえこむことになりましたが、アキノ政権の安定性に役立つのなら将来性はあると思います。彼女は民衆のための政治をしようとしています。マルコスがあのような形で去ったということは、家出した父親の莫大な借金を背負った家族と同じです。ですか

らそのような政権の安定のための支援ならいいと思います。そして民衆全体も政府に依存するのではなく、ともに国の再建に力を注ぐという姿勢が必要です。そうすればいい方向に向かう可能性はあると思います。ところが与える側の日本の姿勢が、利益を生み出すためのさきがけとして援助を見るなら、問題の解決にはなりません。日本の民衆も、それらの資金がフィリピンの民衆の本当に望んでいる方向に使われているかどうか注意する必要があると思います。なぜならそれには自分たちの税金が使われているからです。

援助とは単なるお金の流れではありません。その基本は民衆と民衆の結びつきです。フィリピンバナナのことを「食べるべきか、食べざるべきか」と問題になっています。農業は危険だし、かといって食べなければ生産しているフィリピン農家や労働者はこまる……。もし自分の健康を守りたいためだけにフィリピンバナナを食べないのだとしたら、それは偏狭でしょう。しかしこのことがきっかけとなって、今世の中で何が問題なのか考えるようになればいいと思います。自分たちと同時代に世界中で多くの子どもが栄養失調や病気で亡くなっているのです。そのような多くの人々の苦しみの上に自分の生活があると思えば彼らのことに無関心ではいられないはずです。

もう1つフィリピンバナナを食べない理由に、民衆を搾取しているアグリビジネスを儲けさせるばかりだからという見方があります。最終的にはその土地を民衆のものにとり返し、その土地で人々の食糧を作ることが目的なのですが、その最終目的と現在の状況との段階をわきまえる必要があります。今は現地の労働組合がさまざまな待遇改善の要求を行っています。ところがバナナが日本で売れないと、不況になって待遇改善どころか失業者を招くこととなります。常に現地の状況を把握し、そこでどうしたらいいかを考えることが必要です。

今世界は破壊的な方向に向かっています。富める者と貧しい者の差が広がり、飢餓寸前の人が8億いるといわれます。それは世界にある財産が軍備に向けられているためです。私たちは今大きな船に乗り合わせています。そして、それぞれの人が時代の方向転換をはかるために、努力を払わなければならない時がきています。一度に方向を変えることはできませんが、大ぜいの人が心を一にすれば船も動きを変えることができます。

(談)

# ばななぼうと乗船記

日本語家庭教師 森山久寿子

波を表わした模様の水色のきれいな和菓子がある。しばらく海をみないでいたせいか、こんな和菓子の様な海があるなんて初めは信じられずにいた。デッキから足元に広がる海ばかりをみていた。世界のどこへでもつながっていく海。

日本全国、海外からも、合計500人近い人々をのせた船は、10月5日(土)午後12時30分、神戸港を出航した。航路は、一路、沖縄県石垣島へとられた。

JVCからは、代表の岩崎駿介、ソマリア担当の柴田久史、日本語家庭教師担当の私が乗船した。

海外に現場をもったり、海外の問題に対して支援を行ったりする団体は、乗船者の10分の1にも満たなかった。

海外に興味をもち活動することは、必然的に自分たちの足元、日本という国を問い直すことになる。どの団体も遅ればせながら、国内での関係づくりを模索しているところであった。

## 第三世界ショップ

国際関係グループ(便宜上こう名づけた)は、国内関係者にどの様にアプローチし、関係づくりをしていくかという課題のひとつの解決方法として、第三世界ショップ共同見本市を船内の一室に設けることにした。「第三世界からの直輸入生産物と日本の消費者運動や生産者運動との結びつきが、新しい出会いと新しい暮らしをつくる」という視点で提案を行うためであった。

第三世界ショップでは、手工芸品やTシャツ、絵ハガキ、コーヒーなどが売られた。現地の人々が作ったものを売り、その収益が直接作り手の生活に影響するものや、売りあげ金が、現地の人の活動や国内での活動の支援に役立ったりすると、同じ「物」でも性格は違っている。

JVCにとっては、「物」というのは、「人」のことであり、物交換ではなく人がもつ情報、経験、価値の交換であり、人そのものの交換でもある。

## 物の向こうに顔が見える？

今回、ばななぼうとの主旨となる、「モノ提携、テーマ連合」という時、物を交換しながら、自然保

護や農業の問題、人間のいのちと暮らしなどのテーマで連帯していこうとするのだが、物のむこうにある顔、思い、問題点が本当にみえてくるのだろうか、という疑問が起きる。

例えば、安全な野菜を食べたい、食べることによって自分の健康が保障されるという考えは、自分さえ良ければいいという発想である。自分が食べる野菜は、誰がどんな思いでつくり、その作ったものを食べることが、対社会関係(農業のあり方、流通経済のこと、環境問題等)に於て、どんな役割を果たしているのかを考え、実践していかないと単なる生産者と消費者に終わってしまう。生産者であり消費者であり、そして同じ社会の上で生活を営んでいることを認識した時、共通の問題意識をもって、現状の問題をより良い方向へむかわせる力となるのではないかと思う。

だからこそ、国産バナナやコーヒーをつくっている徳之島の吉玉さんや奥田さんの農場に足を運び実感として、連帯していこうとしたのではないかと思う。

この点について、海外で作られた手工芸品やコーヒーから、相手の顔や思いをみだしていくことは難しい。よそさまの問題という感はぬぐいえないのである。フィリピンからバナナ農園労働者がきていて、バナナ農園労働者の人権を無視した過酷な労働状況を訴え、共に問題を解決していこうとした時、「フィリピンバナナのせいで、国産バナナはダメになった」という発言がでたのであった。

物をつくり出す苦勞を知る同じ立場の人間として連帯していけるのではという期待は、もろくも崩れてしまった。しかし、果たしてそうなのだろうか。

## フィリピンバナナの問題は私たちの問題

日本で禁止された農業は第三世界へ流され、フィリピンのバナナ農園では野放しに使われ、作られたバナナは私たちの口へ入るのである。

禁止された農業は、日本の生産者、消費者にとってしか意味をもたないのであれば、結局、自分さえ安全であればという枠を出ないのである。

フィリピンバナナが市場を占めていることに対し

て国産バナナはどうしていくか？国産バナナも農業政策の中で痛みつけられたのではなかったか？

共に手を携えて解決していかねばならない状況におかれている。自分たちの利益をどうするかも抜きにはできないが、少しずつでも、新しい道を見出していかなければならない。脱サラをして、ゼロから農業を始めた人などは、難民が日本にきてゼロから生活を始めたことに共鳴し、手をつないでいけるのではないかと発言していたが、これはお互いにわかりあえるきっかけになるかもしれない。

いろいろな問題が投げかけられた。これは、バナナだけのことではないことを、国内で活動する人も海外に活動をもつ人も共に問われたのである。

### 「モノ提携・テーマ連合」

今回、ばななぼうとを提唱した一人、「徳島くらしをよくする会」の西川栄郎さんの言葉をかきと、「原発、核廃棄物、ダイオキシン、農薬、食品添加物、合成洗剤、薬害など生命系の未曾有の危機の中において、先日のソ連のチェルノブイリ原発の事故な

どは地域を越えて、様々な問題を身近に考えさせられるものになりました。ひとりひとりの生活の有様としての原発、そのうちのたった一基の事故が国境を越え、地球レベルで「いのち」を呑みこみ、安全なくらしを否定したのです。

私たちは、単なる批判、反対にとどまらず、ひとりひとりの生活の場での問い直しをし、問題解決のための新しい生き方、代案の提案をしてきました。例えば農薬、食品添加物などの心配のない安全な食べものを実現する運動、人間らしい農業の実践、有機農業の運動、使い捨て文明、ゴミ問題と取り組んだりサイクル運動、さらには平和、環境、医療、教育、福祉など衣食住の多様な分野での『いのち、自然、くらし』をテーマにした生活に根づいた草の根の市民運動、ほんものの生活を創る運動をしてきました」と言っている。この時に、私たちは、第三世界の存在と、関わりを忘れてはならないだろう。

具体的な関わりを求めて、海外活動グループから下記のようないくつかの提案を行った。

### 「JVC（日本国際ボランティアセンター）」

1. 日本に定住したラオス、カンブチア、ベトナム難民（約4700人）を日本の農村に招き、相互交流をはかってほしい。  
（特に東京以外で農業に従事している人たちの協力をお願いします）
2. 有機農業技術者を飢餓に悩むエチオピアと、難民が集結するソマリアに送ってほしい。
3. スタディ・ツアーで、タイ、ソマリアに行き実際に現地をみてほしい。

### 「フィリピンバナナ問題、農薬を考えるワークショップ」

日本で私達が食べるバナナの80～90%はフィリピンのミンダナオ島で作られています。フィリピン人はアメリカ系の会社でただの労働者として、ひどい労働条件下で働かされています。先進工業国で使われていない危険な農薬を手袋やマスクなどの防具なしで散布させられ、多くの労働者が病気や事故に会っています。

こうした状況に対して、バナナを食べ続けている私たちにも責任はないでしょうか。作る側と食べる側が、平等で公正な関係をもつことが、消費者の利益にもつながってゆくと思います。

1. 日本における「フィリピンバナナ」問題についての啓蒙活動に、積極的に参加して下さい。
2. 日本向けバナナをフィリピンで生産している日・米の企業に対し、特に危険な農薬の使用を禁止するよう要求して下さい。

### 「地球の友」

環境と人間を考えていくという主旨のもとに、風力や電気エネルギーなど石油や原発に替わる再生可能なエネルギーの考えを広めたりしている。1969年、アメリカでつくられ、ヨーロッパへ広がり、現在はいろいろな国で、独自の活動を展開している。

1. 南の木材を使った安い板等の使用をやめることはできないか？
2. アジア開発銀行の役割及びその内容について一緒に勉強しよう。
3. 日本がいかに東南アジアの森林破壊に加担しているかを勉強しよう。

### 「ネグロス・キャンペーン」

ネグロス島の砂糖や物産品の輸入を積極的に受け入れてくれる日本の共同購売グループや市民団体を必要としています。この民衆貿易の目的は、飢餓と貧困に苦しむネグロス民衆の自立の為の活動を支援する資金を得ることです。

1. ネグロス民衆貿易連合体のカウンター・パートとして、民衆貿易のための日本連合体をつくりたい。
2. 11月頃、両連合体の実務レベルでの話しあい  
1月、実験的砂糖貿易をする。  
2月、ネグロスの状況を日本の連合体の人々にみてもらう。  
3月、民衆貿易を具体的に実現したい。

# 東南アジアの味・雑感

アジアの歴史人類学研究者 星野龍夫

## 多様な世界

東南アジアの味は一樣ではない。料理一品一品の味が違うのは当然であるが、各国料理全体にも一応特長がある。何々（民族）風であるとわれわれの舌が感じることはあっても、これこそ東南アジアの味と一口に言えるものはない。またどこへ行って食べても辛いかという、そうでもない。辛いもの、日・中・欧米食から見れば辛いと言える料理が多いことは確かであるが、ベトナム、ラオス、北タイ、ビルマ、フィリピンの料理は総体的に見て辛いものは少数である。現在旅行・滞在が容易なタイやマレーの外食料理に辛いものが多いのである。私はこの「東南アジア」という表現法にこだわってしまう。この地域には宇宙的な差異と多種多様な色合いが存在するからだ。

数年前に『食は東南アジアにあり』という本を共著で上梓したが、私には「タイ食物誌」という著述プロジェクトがあったので、その範囲内で協力することはやぶさかではなかった。特に編集者は「東南アジア」という全体的な呼び方の方が一般に受け入れやすいと言い、共著者も私などより広範囲に取材する人なので「東南アジア」に積極的であった。しかし私が普段用いている尺度からいえば、自分はビルマやカンパチアの食事については何も知らないといった方が正しい。

ラングーンには十何回も行き、ビルマ人の友人と毎日ビルマ料理を食べた。カンパチアへラオスから小型の30人乗りぐらいの飛行機をチャーターして（その頃私は観光会社を経営していた）、アンコール遺跡を数回集中的に見物して歩いたが、ホテルでの食事はフランス料理であった。クメール語を母語とするタイのスリン県出身の友人もいるが、だいたい一緒に食べる食事はタイ料理である。インドネシアやフィリピンについても同様である。旅行中に確かに土地の食物しか食べないようにしているが、そういう旅行を何回してみても、そんなものは「知っている」うちに入らないと思っている。数回の旅行や取材ぐらいでは、土地の人々が個々の味につい



とうがらしをおかず、蒸したもち米を食べる（東北タイ）

てどのようなデリケートな感覚を働かせ、細々と感想を言い合っているかなど分かるものではない。

## 外食のラオス料理はバンコクで

広東、上海、ラオス、タイ、ベトナムその他フランスなどの欧米の食に関しては、以上の「知らない」食物に比較すると知っている方である。香港、九龍で奥さんが上海人、亭主が広東人の家に長逗留、というもおかしな言い方だが（逗留は短期滞在だから）、一年近く住んでいたことがある。一度も日本料理店に行かず、ロードにやられて胃病になってしまった。その後お腹がやっとすっきりした頃から私はアジアの料理が何でもおいしく食べられるようになった。

次に3年間住んでいたラオスの料理にもうまいものがあることは分かったが、三食ともラオス食を食べていたわけではなかった。町にラオス料理店は皆無に近かったが、一方ベトナム、広東、潮州、フランス、アメリカそしてまれにイギリス料理と、町が小さいくせに各国人が住んでいたせいもあり、外食に便利な所であった。

朝食は道路をはさんで我が家の正面にあった、ベトナム人一家がやっていた雑貨屋兼小食堂で食べた。村という感じのその附近の人で店はいっぱいで、活気があり、甲高いベトナム語と優雅なヴィエンチャン方言のラーオ語がとびかい、やかましくも楽しかった。人間が男も女ものびのびと暮らしているのはタイ以上である。タイにいる日本人が、どうしてこんなに自由さを感じるのだろうかなどと言っているが、

あの土地を知ったら何と言うだろうか。

昼もベトナム食が多かった。朝がムーヨー（ベトナムソーセージ）をバケット風パンにはさみ、ラオスコヒー（ボロベン高原産）の場合は、フォー（フォー）という麺を昼食に食べる。町中にこの麺屋があり、どの店がうまいとかまあまあだ、などと評定しながら自転車やバイクに乗って食べに行く。タイ料理は少なく、メコン河を渡って対岸のシーチュンマイ、ターポー、あるいはノンカーイに出ないと本格的なものは食べられず、遠過ぎて数カ月に一度しか縁がなかった。ヴィエンチャンでパーミーやクイティオを売る店は一軒しか知らなかったし、実際数軒しかなかったようである。

外食は圧倒的にベトナム、広東、フランス料理であった。主に野菜（常に生）とチャーゾー（春巻。ラオスではチャーヨーと発音）、バンクアン（蒸し器で作る白くつやつやしたクレープ。中にミンチの肉や野菜を入れる）などを食べた。外食でなければ市場で材料を買ってきて、でき合いならそのまま、または家で作り、カオ・ニャーオ（もち米）の蒸したものを、スープ・ノーマイ、ケーン（汁物）と半分ベトナム食、半分ラオス食のような食事をよくした。

和食の材料はバンコクへ旅行に出た在ラオス日本人がみそ、しょうゆ、のり、漬物、シャケ、たらこなどを時たま持ちこむぐらいであったから、日本食は中途半端なものが時々できるくらい。本格的に食べるのは一年に一回、大使館が在留邦人を正月に招待する時だけであった。この会に出席すると、どうしたわけか私は必ず下痢をした。

ラオスに長期滞在していると（確か6カ月過ぎると半移民のような資格が取れ、10年後に移民の資格を得られた。この6カ月目に今日本で問題になっている、指紋押捺があった）タイ入国が容易になる。ラオスの車をタイで6カ月間だけが乗り廻せるようになるので、よくフェリーでメコン河を渡り、バンコクやウドーンへ行くようになる。もちろんこれは当時の事情であるが。

バンコクに出て驚いたのは、本格的なラオス料理店があり、舞台でモーラムの唄や踊りを見せていたことだ。ラオスの観光局が一度計画して流れた民族食と芸能の店が、タイの首都ででんと商売しているのである。この現象の社会経済上の理由は別に難しくはない。東北タイにはラオスの数倍のラーオ人が住み、金廻りが中流ぐらいの人も多く、外食も盛んとなるからである。そしてラオスでは祭日の屋台でし

か買えないピン・カイ（カイ・ヤーンともいう）という鶏を焼いた料理もタイなら大小の店で日常売っている。とにかく外食のラオス料理に親しむようになったのはタイに行ってからだった。

### 東南アジアの味は家庭にある

60年代のラオス、カンブチア、ビルマ、マレーシアなどには民族食堂は非常に少なかった。タイでも本格的タイ料理は家庭でしかありつけなかったといえる。外食のタイ料理はあっても簡単なものしかメニューに載っておらず、時間をかけて作る料理専門の店はバンコク全体でも数軒に過ぎなかった。うまい飯は家で作って食べるものだったのである。現在でもこれは真なりだ。外食のタイ料理はタイの家庭料理の変種である。これはかなり重要なことで、特に外国人などは忘れがちである。タイ料理、タイ料理とさわいでいるものにレストランでしか食べない一風変わったものが多い。外食のタイ料理に独創的なものが多く、わずか数年外国に行っていたタイ人がバンコクで外食をしたところ、知らないもの、新しいものが出てきて驚いたという。ところが家に帰ると、都市部でも、農村ならなおさらであるが、変わらぬ食事をしていたので安心したそうだ。

であるから、東南アジアの味は「どこ」にあるのかという問いには「家庭にある」と答えて間違いはない。レストランにはないのである。

私のタイ料理との出会いはいろいろと幸運であった。広東、ベトナム、ラオス等熱帯、亜熱帯の植生、産物が似通った国の食になじみ始めた後で、豊富な伝統ある食事と十数年間に渡ってゆっくりと付き合えたからである。また年配の経験ある人が新鮮な材料から作る料理に毎日接することもできた。朝食を除いて、昼、夕食は必ず中部タイ式の家庭料理だった。（朝は華僑風の粥か油条<sup>ヨーティアウ</sup>などでなければ洋風のパン食が多かった）

### パリにはインドシナ料理の材料がそろっている

この十数年の間に、数年ほどフランスとのつきあいがあるが、周りのフランス人もインドシナ育ち、インド生まれなどアジアに関係の深い連中ばかりなので、晩飯は決まってベトナム料理だった。空輸されてくる熱帯地方の材料に事欠かないパリでは「インドシナ人」も食の心配はなかった。これは自分のことを言っている。よくフランスの庶民の間では日本人はインドシナ人に分類される。もっともイン

ドシナに十数年住むような男だから、日本生まれのインドシナ人である。ブロンドや茶色の髪の人とばかり暮らしていたころ、ある時ローマの空港でシンガポールの女性たちが買い物のお話をしているのを見て涙が出たことがある。なぜかその時はしばらくアジア系と出会わなかった後で、これからまたバンコクに帰るのかと思ったら、その見知らぬ東南アジア人たちの声を数分聞いていて涙が出てしまったのだ。日本語を聞いても涙は流さなかっただろうが。

東南アジア料理の材料は、確かにパリだと日本の十倍以上（いや数十倍かもしれない）出廻っている感じがする。街角でも実によくベトナム系の住民を見かけるのだが、太陽が足りず、自分たちの風土が存在しないあんな所でよくがんばっていると思う。

私自身も料理人に作ってもらったものを食べるだけでなく、料理をしているが、日本でまだ東南アジア料理を作ったことはない。材料が全部そろわないからである。日本では主として中華料理かフランスの田舎料理を作る。最近では韓国のもも試みている。

フランスに住むインドシナ人が日本に来ると、よく「あっ、ラオスみたいだ。田んぼがある。こんな草木がある」といって喜び、故国をなつかしむ。ところがどういうわけか、料理の材料はフランスの方がそろっている。これも理由は簡単である。日本が受け入れるインドシナ難民の条件が厳しく、旧サイゴンでハイエナのごとく利益をむさぼっていた日本企業は、元の社員やその家族の面倒もみない。そしていくら遠くて寒さが厳しくても30万人受け入れる（難民わくは12万人）国の方へ人々は行ってしまっからだ。

### 私たちと東南アジアのつながり

日本の風土は東南アジアと連続しているので、農村の景観も夏はそっくりで、東南アジアの草木の種を蒔くと生え育つ。いかなる主張のもとに近代日本の歴代の政府は東南アジアと日本に連続はないといい、ある時突然大いにあると言い出すことを、われわれ皆よく知っているところだ。早く駅の近くのスーパーや八百屋さん、乾物屋さんでパリ並みに材料を買い、東南アジアの味（どこの国の、どの料理の味であろうと）を本格的に家の台所で醸せる日を期待しているのだが、この方は国の予定表では中国や朝鮮半島の次であって、理想的なことばかりいってられない。残念というほかない。日本のインテリは中国を敬しすぎることでバランスを欠いている面

小舟に乗ってそば屋のおばさんがやってくる。



がある。現代では漢語風の表現が自己喪失であるとも意識していない点と、東南アジア的世界への不健康な態度は同じ構造のような気がする。

最近久しぶりに源氏物語や平安朝の女性の日記を読んで、広くタイで読まれている仏教観に根ざした小説との世界の近さに驚いて、考えている。食文化の面でも深い観察と経験から、日本食との共通性や差異を眺めたいと思い、タイ料理の味1つにしてもそれをよく知る必要から、可能ならば過去の味も作り出したい。そこで、タイでも唐辛子を使わず（唐辛子は南米原産で16-17世紀に伝播したもの）しかも伝統的な食物を継承している地方などにも行ってみた。（もちろん台所に実際に入って、具体的に知らないといけない）

日本の暖かい地方は、東南アジアの気候風土と年間の一時期、大変よく似た基本条件がそろっている。その部分を積極的に日本史の中から取り上げると、食文化史に限らないが資料の多さでは枚挙にいとまがない。これは今でも新しい視点であって、柳田国男などすでに気づいている人も相当いるが、方法論では模索中である。私は何も難しいことをいっていない。

タイへ行って、トム・ヤムというスープに二種類あるのに気づいて、唐辛子を入れないスープを食堂で注文すれば、上にいったようなことをその人は実践研究しているといえる。そこでの行動を意識化しただけの話である。日常のささいな行為がいかに意味深いかは、議論と多読（または多視聴）が意識化を助けてくれる。ただどこの店のどの料理がうまかったか、（もちろんそれは広東人のいうように好野であり結構だが）それだけでは満腹しない。食事したあと、いろいろ人間的な面に気付くから、食文化という考えも人の口端にのぼるようになるわけである。

この店のことなら面白い。店主のルー・ホンさん(53才)はベトナムでは一、二といわれたダンサーだった。奥さんのミー・フォンさんも、歌・踊り・演劇と何でもこなすタレントだったし、娘さんのルー・フィン・チャウさんは、「スター誕生」で日本の芸能界へデビューした。根っからの芸能人一家である。'75年3月、奥さんが劇団を連れて日本興業中、ベトナムで政変が起きる。奥さんは日本へ残った。

「私も辛かったが、子供と離れて暮らす母親はもっと辛かったでしょう。結局、私は'79年に娘と息子を連れてボートでベトナムを脱出しました。マレーシアへ流れ着いて3カ月後、やっと私達家族は日本で一緒になれたんです……」とホンさんは当時を語ってくれた。

この店は、ベトナム料理店ではなく、ベトナム風料理店となっている。日本人向けに味つけを工夫してあるという意味で「ベトナム風」と名付けたという。「でもね、店へ入ってきたお客には実は本物を食べてもらってますよ」とホンさんはいたづらっぽく笑う。細い体だが、動きは若くしなやかで、やはり舞踊家の目の光と優しさをもっている。この店をやると思ったのはなぜかと尋ねたら、こんな言葉が返ってきた。

「家族のためです。日本へ来て会社へ入りましたが、私の年令で言葉もできないとなれば、決して楽な仕事はできません。もちろん私は苦しくてもどんな仕事もやりました。でも体は私の気持ちについてこれなかったんです。体を壊したら最後、会社にも迷惑をかけるし、家族はどうなりましょう。家族全員が助け合っていつもみんな生活できる道は、と考えた時、やはり自営業をやるのが一番だと思ったんです。しかも一銭の借金もなく店を作ろうと思いました。だから東京ではなく、ここへ落ちついたんです。お客ですか?あまり多くありませんね。赤字の時も多いですよ。宣伝もあまりやってません。資金が無いですから、アッハハハ……。この道を選んだのが成功かどうかはわかりませんが、いつも家族と一緒に、幸せだという自信はありますよ」。

娘さんのチャウさん(21才)は昼間、歯科医で働きながら、TV等の仕事が入ればそれもこなしている。日本語はむしろ私よりうまいぐらいだ。来月に、親戚に会いに米国へ行くという。それを聞いて私は少々慌ててしまった。「まさかそのまま帰って来ない



〒228 座間市相模が丘3-33-10  
tel 0427-47-5811

おすすめ料理  
Aコース(2~3人) 3000円  
鳥肉しょうがにこみ  
えびサラダ等 6品  
Bコース(3~4人) 4000円  
豚肉ココナツにこみ  
春巻あげ等 8品

つもりじゃないだろうね。僕はあなたのファンなんですよ」。

彼女は吹き出して言った。

「もちろん帰ってきますよ。日本にはたくさんの方のベトナム人が定住しています。彼らはみんな淋しい思いで暮らしてるんです。親兄弟や恋人と別れて暮らしている人もたくさんいるでしょう。そういう人たちを残して、どうして私が米国へ住めるでしょう。「私は帰って来るんだ」と胸をはって米国へ行きたいですよ」。彼女の魅力はこういうところにある。

父親のホンさんが目を細めながら後の言葉を継いだ。「娘はまだ世界のことをよく知りません。米国へ行ってみるのも勉強になるでしょう。私自身、英仏や南アフリカ、モロッコやアジア諸国で踊りましたし、人間として、死ぬまで勉強しなくちゃならない。お金も問題ではありません。文化の交流、そして人間のために踊ってきたつもりです。人生、登ったり降りたりはありますが、頑張ればできますよ……」。

さて、このシリーズも今回で終りなのだが、この取材を終えて店を出た後、肝心の料理の取材をすっかり忘れていたのに気付いた。しかし、日本に定住したインドシナの人々が作ったレストランを訪ねる本当のおいしさは、決してその料理にあるのではなく、彼らが身をもって僕らに伝えてくれるメッセージの中にこそあるのだ。レストラン探訪、腹も満腹、心も満腹。いやあ美味かった……。 (矢野)

## 10・11月の動き

### JVC農場歓迎パーティ

10月11日

「田舎るちあ」の黒木さんのお宅  
 体育館のように広いガラス張りのお部屋  
 劇団JVCのパート・マイムの熱演がある  
 チキンのジュウジュウ焼ける音と煙  
 ほどよく冷えたビール  
 だんだんと高揚してくる皆の顔  
 尾崎紀世彦の歌が、ガンガンと弾ける  
 調子を合わせたように  
 外はバケツをひっくり返したような大雨  
 思わず「芸術はバクハツだァ！」と  
 叫びたくなるような一夜だった  
 この「田舎るちあ、ぶっとばせ島国根性PART2」  
 はJVC千葉県の東金農場開きを歓迎して、山武ボラ  
 ンティア、田舎るちあの人達が開催してくれたもの。  
 「県民の日」に難民、留学生の日本家庭受け入れに  
 協力して下さったお馴染みのグループである。

土肥市議から「今どきはやらない農業を、一生懸  
 命やろうとしている井本君に、是非頑張ってもらい  
 たい」という激励があり、岩崎代表は「『地域に根ざ  
 し、世界と結ぶ』というのが我々の考え。農場とい

う具体的な形が出来て嬉しく思っており、地元の皆  
 さんと仲良くやっていきたい。そして皆さんには、  
 JVCの持っているチャンネルを利用して、どんどん  
 世界に出て行って欲しい」と挨拶した。

黒木邸の近くに借りることができた農場は約1.5  
 ha。田30a, 畑50a, 梅林15a, その他諸々で広い  
 ばかりでなく、昨年まで使っていた状態のいい田畑  
 であること、コンバインなどの農機具一式も使える  
 こと、それに何より農家一軒の家賃、田畑の使用料  
 も格安で、井本さん達の熱意が実った格好だ。とり  
 あえずは近所の稲刈りを手伝い、人々と知り合い、  
 家をチーム・ハウスとして使えるよう準備して、来  
 春から本格的に田畑を耕していくつもりという。今  
 は寂しいが、やがて海外から帰国したメンバー達の  
 「家」として、地元の人達との交流の場として賑や  
 かになっていくこ  
 とだろう。農繁期  
 には、東京からも  
 援農隊が出かける  
 だろうし、楽しみ  
 一杯な農場である。

(吉武)



### ばななぼうと

豪華客船に乗って南の島をまわり、船の中で170  
 の市民団体520人が話し合いをするという「ばなな  
 ぼうと」が出航した。10月5日から10日まで石垣島  
 や徳之島を訪れて島の人達と会い、船の中では日夜  
 数々の分科会が開かれて、村おこし、基地問題、農  
 業汚染などについて様々な意見の交換がなされた。  
 メインテーマは「テーマ連合、モノ提携」、主催し  
 たのは「大地を守る会」「徳島くらしをよくする会」  
 「ボラン広場」「中部リサイクル運動市民の会」とい  
 った共同購入などを進めている、いわゆる国内派と  
 いわれるグループの人達。

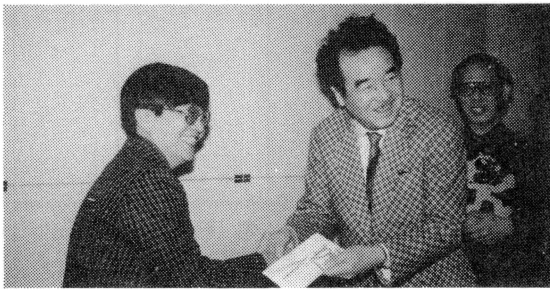
JVCからは岩崎代表、柴田、森山の三名が参加し  
 たが、国内派に対して海外派といわれるJVCは媒介  
 となる物がないために多くのグループとは少しズレ  
 るところがあったようだ。日本で使用が禁止された

農業がたっぷりかかったフィリピンバナナが、ブー  
 メラン現象で日本に入ってきていることから話が始  
 まり、徳之島の無農薬国産バナナ、ネグロスの砂糖  
 の話など、自立や支援、安全、経営、平和といった  
 様々な視点を同時に見据えた上で対処しなければなら  
 ない問題を抱えて、人々の頭は相当混乱したようだ。

とにかくJVCとしては「自分達の安全だけを考える  
 保身であってはならない。南の国を矛盾のゴミ捨て場  
 して欲しくない」ということは強調した。「考えはわか  
 るけど実際に何をしたらいいのかわからない」とい  
 う多くのグループに対して答えを持たないJVCとしては、  
 「とにかく現場に行って見て下さい。報告会を開く機会  
 を作って下さい」と呼びかけた。初めて接するグル  
 ープも多く、ズレがあってあたり前、新しい横のつなが  
 りから生まれてくる何かに期待したい。(吉武)

## 日本漫画家協会から募金をエチオピアへ

この夏、大阪の「世界まんが博'86」において、“Green for Africa”をテーマに、約150人の漫画家によるはがき漫画を展示し、キャンペーンに協力してくれた日本漫画家協会。また、会期中、コンクリートの照り返しの強い広場のコーナーで、関西在住の漫画家を中心に、チャリティ似顔まんがを描いてくれました。その売り上げ50万円が、JVCのエチオピア復興計画のためにと、去る11月21日、銀座の協会新事務所のオープニング・パーティの席上、加藤芳郎理事長から、星野昌子JVC事務局長に贈られました。“かしこまって”となるところがユーモラスなやりとりの授受でした。次はどんな企画を、と担当者は漫画家パワーに熱い期待。(佐久間)



## 国内プロジェクト合同ミーティング開かれる

10月22日、11月26日と2回にわたり合同ミーティングが開かれました。これは、JVCを母体として生まれた国内プロジェクトのメンバーが、より国内活動を活発なものとし、相互の連携、つまり横のつながりを持つという呼びかけが契機となったものです。これまでいくつかの国内プロジェクトが生まれましたが、それぞれが別々の活動をしていて他の会員には実体がよくわからないという声がありました。そこで、今後は国外の活動だけでなく、それを支える国内活動をより充実させるため、SHARE（国際医療保健情報センター）、サヘルコミッティー（サヘルの緑化プロジェクト）、JAST（農大生による農業プロジェクト）、日本語家庭教師、劇団JVC（パントマイムを通してJVCへの人々の関心を集める）、始まるまで待てないプロジェクト（バザー、上映会等を実施）からメンバーが集まりました。

ミーティングでは国内活動をもっと地域に根ざしたものにしたい、現地から戻ってきた人の受入れ体制をしっかりとせたいという統一見解が得られました。まだ、結果として国内の大々的なプロジェクトを企画するといった段階にまでは到達していません

## The Charity Show

ILC (International Language Centre) の先生、逸見尚子さんと、JVCの加納妙さんが中心となって「The Green For Africa Charity Show」が開かれた。

11月15日、神保町の岩波小ホールに約100人が集まって、歌やダンス、食事を楽しみ、結果的に集まった16万円は、エチオピアの植林に役立つことになった。参加者は英語学校の生徒の日本人と外国人教師が半分半分だったようだが、日本人の方がチャリティーの意味がわかっていないという認識から、日本語で挨拶したという話は、やっぱりと思わざるを得ない。まだまだチャリティーの機会が少ないからだと思うが、「これをきっかけとして教室の中でも、チャリティーや開発の意味を考える雰囲気が出て来た」と言う逸見さんの体験のように、まず周りで機会を作っていくのが大切なのだと思う。

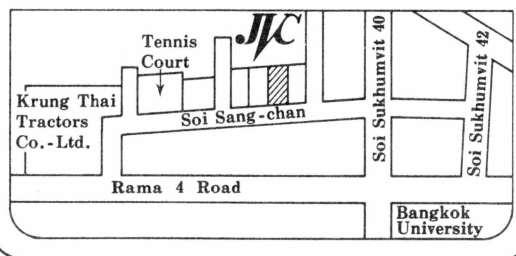
当日はシンセサイザーの演奏あり、劇団JVCのパントマイムありで大変賑やかだったが、好評だったのはガーナ人とエチオピア人が用意した郷土料理。そしてガーナ人ジョナスさんと一緒にガーナの童謡を歌った時、会場は一気に盛り上がった。(吉武)

が、今後も月1回のペースで合同ミーティングを開き、互いに連絡を密にして、協力しながら国内活動を盛り上げていきたいと考えています。1人でも多くの方の参加をお待ちしています。(山本)

## JVCバンコク事務所の移転

日本人会の移転にともない、JVC設立以来親しまれてきたバンコク事務所が、11月1日に引越をしました。新しい事務所は住宅街として有名なスクンビット通りと、ラマ4世通りの間にあります。今までより少し不便ですが、三階建てで部屋数は6室に増えました。

29/3 Soi Sangchan, Sukhumvit 40,  
Rama 4 Road, Bangkok 10110.  
Tel : 391-1117



# JVCプロジェクト

1986年11月25日 現在

活動地名	活動内容	出資団体	担当者
東京本部	<p>渉外, 事業計画, 資金調達, ボランティア調整, 会計, 総務, 情報収集および広報等。 機関誌『トリアル・アンド・エラー』発行。 JVC 説明会 - 毎月第1月曜日 午後6時~9時 第3日曜日 午後1時~4時 学習会 第4月曜日 午後6時~9時</p>	全国社会福祉協議会	岩崎駿介 (代表) 星野昌子 (事務局長) 柴田久史, 佐々木志保, 加納 妙, 前川昌代, 佐久間典子, 古西 勇, 他15人
日本国内	<p>●日本語家庭教師 新体制のもとで, 神奈川県下のボランティアを募集した。オリエンテーションは①難民について, 活動について②日本語教授法について③法律についてと3回行い, 定住センター訪問など活動のための準備に力を入れるようにしている。 定住者の住所は変更が多いので, 訪問調査を地区別に行っている。 埼玉, 東京でのボランティア募集, 訪問調査は12月以降となる。『そんぽっと』は10月は休刊した。</p>	ジャパン・タイムズ 神奈川県福祉部 国際婦人福祉協会	森山久寿子, 落合正幸 地区連絡係10人 他約50人
ソマリア モガディシュ 事務所	<p>渉外, 事業計画, 会計, 総務。</p>	UNHCR R.I. ジャパン 創価学会文化・ 平和運動事務局 ジャパン・タイムズ	嶋 紀晶, 浜野敏子, シアッド
マガネイ・キャンプ (ゲドー郡)	<p>●農業による自立促進 / 定住 中田正一氏が風車と水車を完成した。 アグロフォレストリーのための整地を開始。 養鶏プロジェクトの鶏は順調に育っている。 読み書き教室を再開した。</p>		荻ノ迫善六, 山口誠史, 法橋 亮, モハメッド, ラシッド, ハジ, アオキ 船川秀夫, 五十嵐裕昌
マغدール・キャンプ (ゲドー郡)	<p>●医療・保健 / 補助給食 8回の難民移送が行われ, 約1万1000人が移動した後, 10月25日をもってマغدール・キャンプの活動を終了した。残った人々はマガネイとドリアンリーのキャンプで食糧配給を受ける。</p>	朝日新聞厚生文化事業団 モラロジーMIRC 仏国土をつくろう会 砂漠に種をまく人の会	榎田秀樹, 石井弘代, シェイク・アブディ
ジャボレ・キャンプ (ヒラン郡)	<p>●医療・保健 / 補助給食 補助給食, 医療活動のほかにコミュニティ・ヘルスワーカー, 助産婦の訓練をしている。 ●植林 試験的に果樹の栽培を開始。植林地は従来の1haに加え4haを確保。 ●インカム・ジェネレイティング (難民が現金を得るためのプロジェクト) ドンキー・カート (ロバ車) の貸しつけをしている。</p>		掛村 均, 米澤 聡, 中路美和子, 庄司 美, 高畑辰弘, シュクリ, ハッサン, アブディ
エチオピア (ウォロ州)	<p>●総合的復興促進 種子銀行では種子貯蔵庫づくりや来季用種子を準備している。植林のための苗木 (5万本) を育成中。 10月中旬より, 低体重児を持つ家族を中心に栄養指導が行われた。また料理教室, 家庭菜園の指導が開始された。 農業, 植林, 衛生にかかわる“きれいな水”の確保が問題としてあがっている。マーシャ村に掘る深井戸のための調査が行われた。</p>	朝日新聞厚生文化事業団, CRDA, 西本願寺, チャリティ・カレンダー, チャリティ・サイクル, メリノール修道士会, 全国老人クラブ連合会	内山田 康, 林 達雄, 伊藤達男, 伊藤幸子, 内藤のぞみ, 久田信一郎, イエットベルク, ソロモン, パレタ, フェテルワ ルク, ダニエル

活動地名	活動内容	出資団体	担当者
タイ バンコク事務所	渉外, 事業計画, 資金調達, ボランティア調整, 会計, 総務, 情報収集および広報, バザー, 古本のセール。 季刊『ニュース・レター』(英語・タイ語)発行。	全国社会福祉協議会	ボンピモン・チャイブーン, カモン・ミンムアン, クリッサダ・タウイパサ 石原淑子, 他約10人
カオイダン (カンブチア 難民キャンプ)	●西崎憲司記念技術学校 国境難民村からの不法侵入者は4,000人に上り, みつかると牢屋に入れられた後国境に帰される。 11月12~14日にかけて, 各団体の活動を紹介するエキシビションが開かれ, 盛況の内に終えた。	UNHCR R.I. ジャパン 妙心寺派宗務所 花園会	熊木政江, 谷山博史, 矢野和貴, ソムヨット・ ラタナタム
国境のサイト2, ノンチャン (カンブチア 難民村)	●補助給食 11月20日, 旧ノンチャンキャンプより約200人が到着した。そのうちJVCの受益者は妊婦11人, 3歳以下53人, 計64人であった。	WFP/UNBRO	テリース, ブーム, トンチャイ, スリペン 蓮尾慶治, 仲田奈々子, ソムボン, スピチャ, エンドリアン, ソムサック,
バナニコム (第三国定住待ち 難民一次収容施設)	●文化オリエンテーション ●日本定住予定者 ①日本語学習の基礎(読み, 書き, 聞き取り) ②日本語の日常会話の習得 ③日本に関する概略的な理解を促す ④渡航に必要な事柄への理解と実習 ●日本以外の国への定住予定者に手続きの理解を深める。 ●子供レクリエーション・プログラム ペーパークラフト, リズム音楽, 集団ゲームなど。	天理教千葉	浜崎妙子, 大場きみよ アナン・プッタミリンパティ
地域開発 (バンコク市内の スラム地区)	●奨学金援助 スラム在住児童が小学校(6年間)を卒業できるよう援助している。本年度の対象者は10のスラムで16校250人。 ●クロントイ図書館 クロントイスラム住民の就学前児童から成人までを対象としている。12区における新図書館建設のため, NHA(住宅公社)と交渉中。 ●移動図書 ラプレー, ナンシーのスラムで子供向け図書を中心に回覧。 ●移動学習センター(プラティープ財団, FFSC, JSRCとの共同プロジェクト) 9のスラムで学習の機会のない子供たちのため人形劇などで教育を行っている。 ●再定住 ラッカバン地区において再定住したバンコク市内のスラムの人たちへの資材援助(長期資金貸与方式)。	モラロジーMIRC NTV, JOFIC 庭野平和財団 京都国際青年委員会	ヴァラナート・チュンクン, サムルエイ・ジョンヨー クラン, アルニー・スニ ット・ムンナイ, リーラ・ クンナロン, スワン・リ ンサムベン, コメイン・ スンサマラ 佐藤正喜
カンブチア (プノンペン カンダール省 プレイベン省 スバイリエン省)	●カンブチアの人々への総合的人道援助 11月17日より「救援のためのワークショップ/技術学校」の建設工事が開始された。'87年2月には完成し, 3月1日にオープニングを予定している。 プレック・ピノウ孤児院では男子用宿舎の補修が完了し, トンレサップ川からひく水の浄化を計画。プノンペン市に芝刈り機, ゴミ箱用の資材を提供。 OXFAMと共同で井戸掘りも行っている。	日本青年会議所 関東地区協議会, 全国老人クラブ 連合会, 創価学 会文化・平和運 動事務局 モラロジーMIRC 立正佼正会	熊岡路矢, 簗田健一
人材派遣プロジェクト			
フィリピン (PFAC, パラワン島)	●国際移民委員会(ICM)-第三国定住手続きにともなう医療業務及びキャンプ内でのプライマリ・ヘルスケア。	城西病院	青井千恵

## JVCの活動とその目的に御理解を

▶JVCとは—Japan International Volunteer Centerは1980年2月、タイのバンコクで設立された民間救援団体です。1979年暮れの、インドシナ難民の大量流出をきっかけに、日本から駆けつけた若者と、現地タイですでに活動を始めていた日本人とが一体となり、現在の組織の原形ができました。JVCは、活動者の自発的な意志に基づき、日本の個人・団体からの寄付金、国連機関からの委託金等によって運営されています。JVCは、人種、国籍、習慣、宗教その他の信条の違いを越えて、難民および同様の窮境にある人々を対象にできる限り継続的な活動を行ないます。

▶JVCの会員募集について—会員は、総会に出席し、JVCの方針などを決定する他、情報・資料の入手、各種の活動・報告会・上映会・学習会等へ参加することができます。また正会員には自動的に、機関誌(T/E)をお送りいたします。会員の種別と年会費は以下の通りです。

- ・正会員 (一般会員 10,000円 活動者会員 3,000円  
 団体会員 30,000円 学生会員 3,000円)
- ・賛助会員 金品による支援 (金額は自由です。)

▶機関誌「Trial & Error」のみの購読について

- ・毎号1冊送付 年間購読料 3,000円
- ・毎号4冊送付 年間購読料 10,000円

▶送金の方法—下記の口座へ郵便振替にてご入金下さい。

- ①会員：東京5-48365 加入者名—JVC会員係
- ②T/E：東京3-54186 加入者名—JVC東京事務所  
 (住所、氏名、購読開始月をお書き添下さい。)

▶みなさまの募金を支えるJVCの活動—救援活動をより充実させるため、以下の募金をお願いしています。なお募金の20%をJVCの運営経費に充当させていただいています。

- A. アフリカ難民救援募金 (11月小計 7,000円) アフリカの難民・飢餓民への救援プロジェクトに使われます。
- B. インドシナ難民救援募金 (11月小計 2,000円) タイ国内にある各難民キャンプのプロジェクト費にあてられます。
- C. カンプチア募金 (11月小計 35,670円) カンプチア国内の復興のために使われます。
- D. クロントイ・スラム募金 (11月小計 102,000円) バンコクのクロントイ・スラム内の図書館の運営およびスラム立退き者のための建築資材購入費に使われます。
- E. テッグ・スラム奨学金・基金 (11月小計 12,000円) バンコク市内のスラムの子供達が学校へ通う費用を援助します。
- F. 日本語家庭教師募金 (11月小計 13,304円) 定住難民のための日本語教材費と家庭教師の交通費に使われます。
- G. 医療募金 (11月小計 0円) 緊急事態が発生した場合、速やかに医師を派遣したり、医薬品などの緊急救援物資を輸送するために使われます。
- H. ボランティア募金 (11月小計 0円) 現場で活動を続けるボランティアの健康管理費にあてられます。
- I. JVC運営経費募金 (11月小計 14,300円) 現場を支えるのに不可欠な事務運営経費、人件費に使われます。
- J. 無指定募金 (11月小計 174,539円)

▶送金の方法—下記の口座へ郵便振替にてご入金下さい。  
 東京9-27495 (募金種目名をご記入下さい。)  
 加入者名—JVC東京事務所

## 編集後記

▶東京事務所では毎月一回勉強会を開き、日々の仕事に流され、怠慢になりがちな脳味噌に刺激を与えることにしている。先日はMSG(味の素)の反対運動をしている里見宏さんを招いて、その有害性と犯罪性についての話をうかがった。とかく内向きといわれがちな日本の市民運動だが、里見さんたちは第三世界とのつながりを常に意識している。私たちが不要としたMSGを東南アジアに輸出するのは犯罪だという。タイでMSG反対運動をしている人々を日本に招いて話を聞いたり、日本側から資料を送るなどしてお互いに情報交換してきたそうだ。同じ土俵で助けあう、1つの“市民連帯”のお手本といえないだろうか。



昭和61年12月20日発行(毎月20日発行)

編集人 前川 昌代  
 発行人 星野 昌子  
 発行所 日本国際ボランティアセンター(JVC)東京事務所  
 〒113 東京都文京区湯島3-1-4 会田ビル5階  
 ☎03(834)2388 Telex:2323187 JVCHQ J

バンコク事務所 JVC THAILAND  
 29/3 Soi Sangchan, Sukhumvit40,  
 Rama 4 Road, Bangkok 10110.  
 ☎391-1117

ソマリア事務所 JVC SOMALIA  
 c/o UNHCR P.O. Box 2925  
 Magadishu,  
 Telex:794 HICOMREF SM

エチオピア  
 事務所 JVC ETHIOPIA  
 P.O. Box 6941 Addis Ababa  
 カンプチア  
 事務所 JVC KAMPUCHEA  
 203 Monorom Hotel Phnom Penh  
 Letter:c/o ICRC, P.O. Box 11-1492  
 Bangkok.

印刷所 (株)ベスト・プリンティング

※本誌の記事・写真等の無断転載・複写を禁じます。

定価 送料共300円